

おわりに

本報告書は、平成 28 年度、29 年度にわたって、「新型ホームドア等に対応する視覚障害者誘導用ブロックの敷設方法に関する調査検討委員会」にて継続研究を行った事業の 2 年目のとりまとめである。

委員は、これまでの鉄道ホームにおける視覚障害者誘導用ブロック研究に関わってきた有識者、当事者団体、鉄道事業者から構成され、2 年目には、歩行訓練士および盲導犬に係る有識者、バリアフリー整備ガイドラインに係る有識者を加え、視覚障害者のプラットホームからの転落防止のために適切なブロックのあり方を、よりきめ細かく検討ができる委員構成において議論を行った。

合計 5 回の検討委員会、4 回のワーキング、3 回の有識者会議、及び、4 か所の現地調査、全盲及びそれに近い視機能を有する視覚障害者を対象に 3 回の実験、その他複数の聞き取り調査等により、議論検討の結果、ユーザーニーズおよび供給側の実現可能性、これまでの制度やルールとの整合性を総合的に加味して取りまとめを行った結果である。

平成 28 年度の調査、実験においては、まず、視覚障害者 5、6 名による駅ホームでの行動調査の結果、視覚障害者がホーム上を線路と平行に歩行せざるを得ない場合に、ホームドアの開口部を知ることが自分の位置を確認し、車両の到着の際の待ち位置や乗降の際の手がかりとして重要であることがわかった。そこで、待ち位置等としての開口部をわかりやすくするための適切なブロックの敷設方法を検討する実験を模擬環境において、視覚障害者 5 名を対象にした実験の後、30 名を対象として行った。その結果、開口部のみにブロックを敷設すると開口部はわかる反面、不安も大きい事、開口部のブロックが線路側だけに張り出す配置では開口部を見落としやすいことなどが明らかとなった。また、従来型のホームドアに対応したブロックの敷設方法に従って 60 cm 幅で点状ブロックを敷設した場合に、一部の視覚障害者から方向を逸してしまう可能性があるという意見が出された。

そこで、平成 29 年度の実験においては、平成 28 年度の研究で懸念事項として残された、2 枚敷き（60 cm 幅）の点状ブロック上を長軸方向に歩行せざるを得ない場合に、方向を逸する不安があるか、それがどの程度か確認するため、鉄道駅構内の屋内の模擬実験環境下で評価実験を行った。方向を逸する不安を視野狭窄のあるロービジョン者が訴求していたこともあり、ロービジョン者を含めた視覚障害者 48 名を対象に、開口部の長さ及び開口部を辿れる・辿れないという歩行条件を変えて、歩き方や評価を調べた。その結果、いずれの場合も長軸方向を逸する不安感は小さいが、不安を感じる人がわずかでもいること、辿れるものに比べて辿れない場合や、開口部が長いものほど、歩行目的箇所を見つけづらいことが明らかになった。

これらの結果をふまえ、現状の新型ホームドアの開口部の長さや手掛かりにしやすいかどうか等の特徴、ブロックの敷設の実現可能性、これまでの制度やルールとの整合性を整理した結果から、視覚障害者が鉄道ホーム上において、極力、混乱せず、誤認しない新型ホームドアに対応したブロックの敷設方法について整理を行った。

これまでの制度やルールとの整合性、実現可能性等も加味して、いろいろなタイプのホームドアが混在したとしても、識別しやすいシンプルなものになっている。

本事業は新型のホームドアに対応したブロックの適切な敷設方法を検討するのが目的であるが、実際にはブロックだけでは、鉄道ホームからの転落事故を防止することは難しい。

「はじめに」に記載した、これまでの取り組みを引き続き行い、ブロックやホームドアの設置といったハード面に加えて、鉄道事業者、周囲の一般の旅客、そしてすべての国民が、気配りをし、声掛けなどの配慮をするソフト面での取組を総合的に行うことが重要である。

また、当事者に対して、ブロックの敷設方法（ガイドライン）や、新しいホームドアの特徴などの事前の情報提供や当事者団体などによる周知徹底、車両ドアの位置を示す車両ドアからの音案内、ホーム上の待機列のあり方などをあわせて検討し、周知することが必要である。一般の旅客、国民に対する視覚障害のある人の理解や声掛けの促進、障害当事者に対する教育・啓発なども必要である。

さらには、新型ホームドアは常に開発が進んでおり、今後全く新たな仕組みのものが開発された場合に、あらためて混乱・誤認しないための検討が必要になる。

本事業結果が視覚障害者の転落防止に貢献することを強く願うものである。